

平成三十一年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

後期日程入学試験問題

小論文

試験時間は十三時～十四時までの六十分です。中途退室は認めません。

途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて三枚、解答用紙は一枚です。それぞれが

配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を

記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくつ

て問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待つて下さい。

問題

次の文を読み、問いに答えなさい。

プロの画家になるつもりはなかったし、なれるわけもなかったが、絵は相変わらず夢中で描いていた。

経験が重なった分だけ描写の技術は身についたようで、花や野菜を描くにしても、見た通りのかたちを紙の上に正確に写し取るとはほぼ間違いないことができるようになった。ジャムの瓶やパンの皿に悪戦苦闘していた頃と較べれば、長足の進歩である。

しかし、見た通りに描けるようになると、こんどは、見た通りに描くことがつまらなくなってくる。

誰だって、ちょっと練習すれば、この程度のことではできないではないか。見た通りに再現するのなら、写真のほうが早い。わざわざ絵を描く必要がどこにあるのか。

贅沢といえば贅沢な悩みだが、私は、もっと個性的な絵が描きたい、と思ったのだ。だって、絵描きというのは、その人にしか描けないような絵を描くものではないか。

目に見えるものを、目に見える通りに描けるようになったとしたら、それ以上の進歩はない。その先には、ほかの誰の絵とも違う、独自の世界というものがない。見えないはずである。プロの画家を目指す人たちが石膏や人体のデッサンを勉強するのは、見えるものを見える通りに描くための練習だろう。それは誰もが通らなければならない基礎的なトレーニングであって、最終的な目標ではないはずだ。

ピカソはなぜピカソなのか。

ピカソは少年の時代にすでに画家だった父親を超えるほど優れた写実の技量を示している。それは天才の証ではあるが、その程度の天才なら世の中にはたくさんいる。ピカソがピカソになったのは、その後彼が独自の画境を開拓し、美術の歴史を超越する世界を切り拓いて、彼以外の誰にも到達できなかった領域までのぼりつめたからである。

ピカソにもゴッホにもなれるわけではないが、せめて、デッサンの勉強にひと区切りをつけた画学生が目指す、次のステップくらいにはたどりつきたい。

突然ピカソのように、ひっくり返った目鼻や半分ずれた顔を描きはじめるわけにもいかない。丸いカボチャを四角く描くのも、緑のキュウリを赤く描くのも難しい。長年常識的な人間であろうと努力してきた者が厄年を越えてから非常識になるのは不可能である。

どうしたものだろうか。しかし、どんな絵描きにも、ある転換点があるはずだ。万人に共通する石膏デッサンのレベルから、自分自身の世界を発見し、独自の作品をつくるようになるポイントが。

(玉村豊男『絵を描く日常』、東京書籍、二〇〇七年)

問い

傍線部について、本文以外の具体的な例を挙げてあなたの考えを八〇〇字以内で論じなさい。